

いたいの いたいの 飛んでけ通信

Since 1991～活動歴 35年。通称ガラガラドン。新宿区にある高度医療の病院近くに“ハウスグランマ”を構え、入院児の遊び相手や兄妹、患者家族の交流などトータルな支援を実施。2018年から付き添いにお弁当を、2022年グリーンシェアカッキング開始。今年35周年を迎える



“ホテルアンダのおうち伊豆高原” 子どもを亡くしたご家族に招待旅行 13年継続ありがとう Garagaradon Summer Vacation 2025・6・22～23



2010年



2011年



2012年



2013年



2014年



2015年



2016年



2017年



2018年



2019年



2024年



2023年



2025年

「今後社会のために何が出来ると考え始めた旅となりました」「悲しみはなくなりましたが、共有できることで心が少し軽くなり、励みになりました」参加された方々の声から招待旅行の大きな意義を感じています。一方「病気の子どもと遊ぶガラガラドンが誕生してから35年。その年月の三分の一以上をこうして途絶えることなく支えてくださっている御社の社会貢献に心より感謝です」「社会貢献は一時の善意ではなく、「続けること」にこそ本当の価値があると、NPOに長年関わる中で実感してまいりました」とボランティアの声にあるように、35年のあゆみの中から生まれた企業とNPOのコラボ企画。コナがあっても途絶えず、大きな実を結んでいることに驚き、感謝いたします。この秋に35周年行事があり、記念誌を発行しますがその中でもこうした支え合いの意義を発信してまいります。

13回目の宿泊招待（がんばれ！子供村）

理事長 坂上和子

13回招待合計 83家族（212人）

招待年	家族組	家族数 (病児・親・兄弟)	合計
2010年	6	(6・7・1)	14
2011年	7	(7・8・3)	18
2012年	6	(6・9・5)	20
2013年	7	(7・9・4)	20
2014年	8	(8・11・6)	25
2015年	5	(5・7・2)	14
2016年	4	(3・8・4)	15
2017年	4	(3・8・7)	18
2018年	6	(0・9・3)	12
2019年	6	(3・8・9)	20
2023年	9	(0・13・4)	17
2024年	8	(0・9・1)	10
2025年	7	(0・7・2)	9
計13回	83	(48・113・51)	212



今年も自然の豊かな環境で、くつろぎの時間をいただきました。夜は輪になってお互いの経験や思いを分かち合いました。きょうだいたちにとってここは遊びのパラダイス！館内の遊び場で羽を伸ばして夢中になって遊び、集合写真のときは、「帰りたくない」とべそをかきました。みんなで「ありがとう」のカードを書きました。



参加者の感想

7家族9人（うち子ども2名）

①初めてアングのおうちに宿泊しました。ゆったりと過ごせ、美味しい食事と気持ち良いお風呂をいただき幸せでした。遅くまで皆さんと語り合い学生時代のように楽しかったです。人は時に大きな哀しみや苦しみを抱えて生きて行かなければならないけれども、楽しみや幸せも新たに共有出来ると学ばせていただきました。大切な機会をありがとうございました。w

②今回、初めて泊まらせていただきました。自分と同じように、子どもを亡くした苦しみ、悲しみを抱えている方々と語り合える安心安全な場所と時間を提供してくださり、本当にありがとうございました。私は18年前に2歳半の息子を事故で亡くしました。数年間は子どもが亡くなったのに親の自分がおめおめ生きていることが苦しくてしかたありませんでした。旅行して自分が楽しむことなんて考えもできませんでした。こうしてホテルにご招待くださること、美味しいお食事と温泉とで、「あなたも一息ついていいのですよ、自分の心身を癒していいのですよ」とそっと背中を押してくださっている感じがしました。k

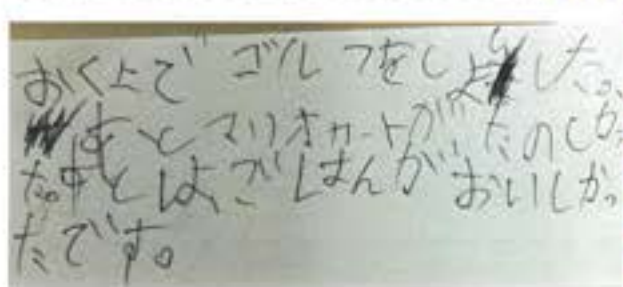
③3度目の参加。毎回、ホテルのスタッフさんのおもてなしに感動します。前年度に引き続き奥様にお会いでき、お話しを聞く事が出来てとても嬉しかったです。H

④荻野社長と奥様には普段は胸にしみていらつしやるお子さまへの大切な思いを打ち明けていただきました。私たちと共通した哀しみを抱えながら長い年月乗り越えられたお姿に力をいただきました。今回ご招待いただいたメンバーの中には初対面のメンバーもいましたが、アングホテルのたくさんの美味しいお料理にアルコール、デザート、自然と話し弾み、温泉やカラオケなどの楽しく居心地の良い時間がお互いの心をほぐしてかけがえのない繋がりを作ってくれました。このように貴重な機会をいただいたこと、心より感謝申し上げます。ありがとうございます。一

⑤息子を2年前に病気で亡くしました。同じ経験をされているみなさんと一緒に過ごした時間は、とても貴重な時間でした。悲しみはなくなりましたが、共有できることで心が少し軽くなり、励みになりました。ホテルの皆さんはとても親切で、食事もおく美味しかったです。朝のウォーキングでは海沿いまでご案内いただき、きれいな景色をみる事ができました。私達のような親に心を寄せていただき、このような場所を提供していただけて感謝しております。H

⑥6年前に2歳の娘を亡くし、その後うまれた2人の息子を連れて行きました。子ども目線とはこのことか、と思うくらいのお施設の仕掛けや配慮があり、この施設の子どもの想いがあふれていました。初めて会う仲間とも、美味しいご飯とお風呂、解放的な空間のおかげでたくさんの想いを共有することができました。自分は今後社会のために何が出来ようかと考え始めた旅となりました。A

⑦再びホテルのご招待を受け心身共にとても癒されました。自然豊かでおもてなしの心配りが考え抜かれた今流行りの素敵なオールインクルーシブなホテルで、親切なスタッフの方々の笑顔にも毎回癒されます。社長と奥様のお話、存在もお会いするたびにますます親近感を感じて、毎回感謝の気持ちでいっぱいです。この旅に参加できるメンバーは苦しみ乗り越えて今やっと幸せを取り戻した人達の集まりなので思いやりや優しさに包まれた仲間と出会えて本当に幸せでした。ありがとうございます。N



おく上でゴルフをしました。マリオカートがたのしかったです。ごはんがおいしかったです。



（左）おもちゃに心奪われて！（右）ゲームセンターで子どもにゲームを教わるボランティア。この間ママはママ友とおしゃべりタイム！



ボランティアの感想

このたびは、第13回目の伊豆高原ボランティアに参加させていただきました。私は初年度から数回、ボランティアとして参加させていただいておりますが、当時の記憶はいまも鮮明に心に残っています。特に、長期入院をしていた子どもたちが、病院以外の場所でも泊まりがけで過ごし、時間を気にせず思い切り遊んだり語り合ったりする様子を間近で見られたことは、忘れられない思い出です。入院生活は、子どもたちにとってどうしても制限が多く、自由がきかない中で、心にも体にも大きな負担がかかることが多いものです。そんな中、このようなプログラムがあることで、子どもたちにとってもご家族にとっても、まさに希望の光のような時間になっていたのではないかと思います。13回目という長きにわたり、こうした取り組みを継続してくださっている社長の思いと行動力には、心から敬意を表します。社会貢献は一時の善意ではなく、「続けること」こそ本物の価値があると、NPOに長年関わる中で実感してまいりました。今回も、お子様を亡くしたご家族、そして関わった私たちボランティアにとって、大きな学びと喜びのある機会となりました。このような機会をつくってくださった社長、スタッフの皆さまに、心より御礼申し上げます。

岡部梨沙

応援して下さい

NPO 法人病気の子ども支援ネット遊びのボランティア
162-0056 新宿区若松町10-1 YSビル302
Tel & fax 03-6380-3115
e-mailsakaue0712@gmail.com

ホームページ: <http://www.hospitalasobivol.jp>

銀行口座: 三井住友銀行深川支店 普通3790894

郵便貯金口座: 記号10040 番号97720491

口座名: 病気の子ども支援ネット遊びのボランティア

当NPOは利用者が広域にわたるため
新宿区や都など自治体からの助成が
受けられず、寄付に支えられています。



河原理子

ガラガラドンが誕生して35年が経ちました。その年月の三分の一以上をこうして途絶えることなく支えてくださっている御社の社会貢献に心より感謝です。さらに宿泊招待をいただく以前から、池袋の「がんばれ！子ども村」でお世話になってることを考えますと、感慨もひとしおです。特にこの度、奥様から伺ったお話に、ああそうだったのかと改めて心打たれました。私は小学校教員として、児童と関わる日々ですが、改めて命の尊さをじっくり考える時間をいただきました。温泉も気持ちよく、心の洗濯になりました。

山本充子

ご招待、まことにありがとうございます。すぐ近くの海の光景、屋上から見る空の広さ、たのしい食事と温泉に心が開かれました。会長ご夫妻と、あたたかく迎えてくださったスタッフの皆さまに感謝します。ご自身の経験を話してくださったこと、社会貢献の動機を聞かれて「正義感」と答えられたこと、深く心に残りました。まるで仲間のように感じられて、こういうつながりがもっと増えたら生きやすくなるように思いました。見習って、私も私にできることをしていきます。外出が難しくなった老母を連れてきてあげたかったなあと、ふと思いました。伊豆は、時折母と来たところなので、いま自分がこうして生きて、ボランティアとして、大切な場と時間を共にさせていただけるとは、文字通り「有難い」ことで、何かの恵なのだと感じました。